

同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と古川仲右衛門教授と宮澤賢治（14）

若尾 紀夫（C昭39・院41）

3学期制の当時、得業研究は2学期（9月11日頃～12月24日）から取りかかり、3学期（1月16日～3月31日）末までには論文をまとめて指導教官（主）に提出することになっていた。賢治の同級生で親友でもある塩井義郎（6）は「得業研究は重要視されていた。」と語っている。「3年生の2学期になると学生は卒業論文を書くことにかかった。卒業論文は卒業成績に重くみられて、全学科の合計と半々に評価されるというので、学生は3年の3学期には、ほとんど論文に没頭して授業を受けずに研究実験を続けていた。」

生徒は各教授に所属し、それぞれ研究課題を与えられる。どの教授を専攻するかは原則的には均等配分であったので、必ずしも本人の希望通りにはならない。研究成果を得業論文にまとめて提出、卒業すると“得業士”の称号を与えられる。大正時代から昭和初期の論文は、年次ごとに製本されて岩手大学図書館に保存されている。

賢治の「得業論文」

その概要

大正7年3月卒業（農学科第2部13回生）の生徒12名の得業論文と指導教官は、古川教授（2名）・関教授（4名）・村松教授（3名）・古川教授と関教授（1名）・論文不明（2名：原勝成・倉島恵）である。

- ・山本延雄：蠶蛹ノ利用ニ就テノ研究（古川教授）
- ・森本一男：澱粉精利用方法ニ就テ（古川教授）
- ・宮澤賢治：腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値（古川教授と関教授）
- ・塩井義郎：飯岡山ノ安山岩及其風化産物ニ就テ（関教授）
- ・鶴見要三郎：鹿児島県国分附近春山産火山灰壩母ノ研究（関教授）
- ・細山田良行：国分及出水ノ火山灰ニ就イテ（関教授）

・佐々木又治：台湾赭土及南洋紅土ノ物理的並ニ化学的実験（関教授）

・成瀬金太郎：清酒及醬油麹菌酵素ニ就テ（村松教授）

・河原田次繁：葡萄酒ノ野生酵母ニ就テ（村松教授）

・小菅健吉：水配ニ関スル調査実験成績（村松教授）

賢治は3年生（大正6年）の夏休み以降、得業研究「論題：腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」（写真1）に取りかかった。その論文（23頁）は以下のような構成・概要である。

緒論：

「腐植質トハ土壤中動植物ノ分解ノ途中デ、様々ナ無機成分ヲ含ム複雑ナ膠質状複合体デ、腐植質中ニハ生物遺体ノ種々ノ分解過程ニアル多クノ有機化合物ヲ含有スル」と定義し、「腐植質中ノ無機成分ガ、植物栄養上イカナル価値ヲ有スルヤハ、19世紀末葉以後、多クノ学者ノ注意スル所ニシテ学説難少ナカラズ。」と歴史的経過に言及している。

「今次古川教授ヨリ本問題ノ指示ヲ受ケ、之レガ岩手県ニ於ケル腐植質土壤ニ就テ、如何ナル結果ヲ得ルヤ実験ヲ行ハントス。」（写真2）とあるように、古川仲右衛門教授の指示（注：研究課題や目的などを専攻生に言い渡す）でこの論題を取り上げ、岩手県に広く分布する不良土・腐植質土壤を対象に研究を行なった。

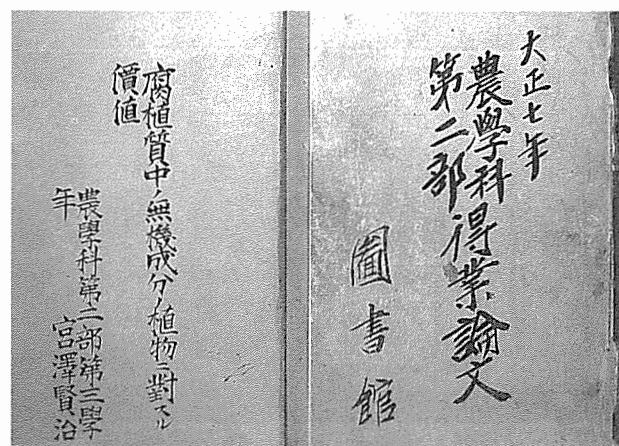


写真1 賢治「得業論文」の表紙

腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ對スル價值。

緒論。腐植質ハ土壤中動物植物質ノ分解ノ途中ニアリテ普通ハ暗褐色ヲ呈シ種々ノ無機成分ヲ含有セル複雑ナル膠狀複合體乃至ハソノ他ノ混合物ナリ。而シテ腐植質中ニハ泥炭ニ類スル狀態ヨリ簡單ナル有機化合物ニ至ルマデノ種々ノ過程ニアル多クノ物質ヲモ包含シ生物遺体ト間ニ成分上劃然タル境無キモ分析上腐植質ト云フハ土壤ヲ稀塩酸ニテ処理シタル後、安母尼亞溶液ニ溶解スルモノミヲ指ス。

然ルニ腐植質中ノ無機成分ガ植物ニ對スル如何ナル價值ヲ有スルヤハ十九世紀末葉以後多クノ研究者ノ注意セル所ニシテ學說論難シカラス。

今古川教授ヨリ本問題ノ教示ヲ受ケ之レガ岩手

写真2 賢治「得業論文」の緒論

多クニュークレイン形態（注：現在では主にイノシトールリン酸「フィチン酸」とされる）ヲ為シ、そのため「植物ニ利用デキナイ」と推論している。

結論（謝意）：

今次実験ノ供試土壤ニ付キ、次ノ結論ヲ得。（写真3）

結論。

今次實驗ノ供試土壤ニ就キ、次ノ結論ヲ得。

腐植質中ノ磷酸ハ殆ド全部植物ニ不可給態ナリ。

ソノ量ハ土壤中現ニ可給態ナル磷酸ノ量ニ比シテ甚大ニシテ、百倍以上ニモ及ベリ。

不良土ニ於テハ、土壤ヲ單ニ自然情況下ニ永時放置スル事ニヨリテ、腐植質中ノ磷酸ガ植物ニ可給態ニ變ズル事ハ期待スベカラズ。

腐植質中ノ加里ハ、比較的少量ニシテ現ニ可給態ナル加里ノ量ト大差ナク、植物營養上ノ大ナル問題ヲ成サズ。

ソノ實際ニ可給態ナルヤ否ヤハ、俄ニ断定シ難キモ、蓋ロ否定的傾向ヲ示ス。

終リニ臨ミテ本論ヲ草スルニ際シ、終始指導ノ勞ヲ執ラレタル古川教授、並ビニ多クノ注意ヲ賜ハリタル関教授ニ深謝ス。

写真3 賢治「得業論文」の結論

腐植質中ノ無機成分ニ関スル従来ノ研究：

本実験に關係する内外の研究成果（文献資料）を引用し、腐植や腐植質中の無機成分の研究を紹介している。

本問題実験ノ方法：

実験の目的は「腐植質中ノ無機成分ガ植物ニ可給態ナルヤ否ヤヲ明ニスルニアリ」とし、無機成分として主に磷酸（P）と加里（K）を取り上げ、その具体的な実験方法を記述している。

実験成績：

岩手県内の腐植質土壤4種類、上田土壤（本学上台実験農場・畑地）、好摩土壤（浜民村好摩駅の南・原野）、御明神土壤（岩手郡御明神村経済農場・未耕土）、大谷地土壤（稗貫郡根子村大谷地・原野）で、腐植含量7.0～12.5%の第四紀洪積層（洪積層）台地の土壤である。何れも「火山灰土壤ヲ母材トシ腐植質ニ富ミ、黒色・輕ク・軟ラカイ腐植質ノ火山灰土壤」で、現在の土壤分類では「黒ボク土」と呼ばれるものである。

分析結果ニ對スル推論：

分析の結果、何れの土壤でも腐植質中の可給態磷酸は極めて少なく、「ソレヲノ土壤中ニ於テハ植物ニ有効ナル磷酸ハ殆ド腐植質中ニ含有セラルハ疑イヲ容レザル所ナリ」と考察し、「腐植質中ノ磷酸ハ、

- ・腐植質中ノ磷酸ハ殆ド全部、植物ニ不可給態ナリ。ソノ量ハ、土壤中現ニ可給態ナル磷酸ノ量ニ比シテ甚大ニシテ、百倍以上ニモ及ベリ。
- ・不良土ニ於テハ、土壤ヲ單ニ自然情況下ニ永時放置スル事ニヨリテ、腐植質中ノ磷酸ガ植物ニ可給態ニ變ズル事ハ期待スベカラズ。
- ・腐植質中ノ加里ハ、比較的少量ニシテ現ニ可給態ナル加里ノ量ト大差ナク、植物營養上ノ大ナル問題ヲ成サズ。
- ・ソノ實際ニ可給態ナルヤ否ヤハ、俄ニ断定シ難キモ、蓋ロ否定的傾向ヲ示ス。

「終リニ臨ミテ本論ヲ草スルニ際シ、終始指導ノ勞ヲ執ラレタル古川教授、並ビニ多クノ注意ヲ賜ハリタル関教授ニ深謝ス。」

亀井（19）は賢治の得業論文の今日的評価として「賢治が行なった実験を通しての結論としては、その時代を考慮すると今日でもほぼ妥当な結論である。」としている。また、井上（12）は「賢治の得業論文は、内外の研究成果についてよく考察されて

おり、格調高く、優れたものである。」と評価している。

賢治は、得業研究を進めるに当たり腐植質土壌に関連する国内外の研究論文を精査引用していることから、その勉強ぶりがうかがえる。また3年生の2学期から約半年という短い実験時間や当時の研究環境などを考慮すると、その内容及び構成は高く評価できる得業論文である。

弟富澤清六(10)によると、賢治は得業論文をまとめるときに沢山のらっきょう漬を買ってきてガリガリ齧りながら「こいつはなかなか頭を使うときにはいいもんだ。」などといって書いていたと言われる。3年生の3学期というと寒さが最も厳しい盛岡の冬、下宿の炬燵の中でらっきょうを齧りながら参考資料を読み、実験データを整理して論文を書き綴っている賢治。筆者も盛岡での下宿時代、ガラス板1枚と障子の部屋で、炬燵だけで厳しい冬を過ごした経験がある。直筆の得業論文を手にして読むと、ユーモラスな賢治の姿を紙面にかいま見ることができる。

賢治がこの論題を専攻した諸説

盛岡高農に入学した“石っこ賢さん”は、関教授(農学科第2部・地質及土壌学教室)と出会い、地質・鉱物・岩石・土壌などを本格的に学び、また同教授の指導で夏期実習の盛岡附近地質調査(2年生)を行い、更に埼玉県秩父地方の地質研修旅行(2年生)及び江刺郡地質調査(3年生)にも参加している。

賢治の得業論文の冒頭には「今次古川教授ヨリ本問題ノ教示ヲ受ケ、之レガ岩手県ニ於ケル腐植質土壌ニ就テ、如何ナル結果ヲ得ルヤ実験ヲ行ハントス。」(写真2)と記されていることから、賢治は古川教授から研究テーマを教示されて研究を始めた。また、結論では「終リニ臨ミテ本論ヲ草スルニ際シ、終始指導ノ勞ヲ執ラレタル古川教授、並ビニ多クノ注意ヲ賜ハリタル関教授ニ深謝ス。」(写真3)と古川教授と関教授への謝辞を述べている。このことから賢治は古川教授(主)と関教授(副)の2人から得業研究の指導を受けたことが分かる。

賢治の1年後輩であった岩田元兄(3)によると「関先生は、当時農学二部の部長であった。少し豪気であり、気難しい所があったためか、一般に学生は近づきにくい様だった。処が、宮沢さんはよく先生の研究室に出入りし、先生の意を汲み、先生の信用を得ていた。」と言われる。このように賢治は関教授の研究室に頻繁に出入り教授の信頼を得ていた。関教授は賢治が最も親しく接した学問の恩師であった。従って、常識的に考えると、賢治が得業研究に関教授の

直接指導で行なうことが自然である。それにも係わらず、賢治はなぜ在学最後の仕上げとなる得業研究を古川教授の教示で行ない、謝辞で関教授の名前を挙げているのであろうか。素朴な疑問をおぼえる。賢治がこの論題を選んだ経緯については、幾つかの説がみられる。

井上克弘説(12)：

「賢治の得業論文は、当初“安山岩の風化の物理化学”であったが、その後“腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値”に変更した。関教授は、大正6年4月、膠質化学セミナー(賢治3年生の時に受講)を始めたが、それは当時最新の学問で、賢治はこれに大きな関心を示した。これが当初“安山岩の風化の物理化学”であった得業研究が“腐植質膠状複合体”を扱った課題に変更された理由であろう。」

佐々木清一説(9)：

「賢治が卒業論文として、初め“盛岡付近の石英粗面岩の研究”を行なったことは大いに頷けることでありましょう。しかし、当時の我が国の土壌肥料学界では麻生慶次郎氏等が農事試験場報告に“土壌中の有機化合物に関する研究(1916)”を発表し、学界の注目をあびた。この中には山陰の大山付近の腐植質火山灰土壌や関東の火山灰土壌が試料として用いられていた。それで、先生方は盛岡の火山灰土壌に興味を持たれて、成績優秀な賢治にやらせてみてはどうかということで、途中から“腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値”に変わったのではないか。」
年表作家読本「宮沢賢治」説(7)：

「賢治は初め“安山岩及びその風化物の物理的化学的研究に就て”というテーマの論文の準備をしていたという。また賢治が論文2編を書いていて一つを級友に譲ったという話もあるが、真偽は定かでないという。」

岩田元兄説(3)：

「賢治が卒業論文を選定するのに関先生の下にいた。クラス中唯一人であったと、先生につくものがないから僕がついたと漏らしたといふありそうなことである。」このように岩田氏によると賢治のみが関教授の指導を受けたことにされている。しかし、実際は関教授の専攻者は4名で、古川教授が賢治の指導教官(主)となっている。

亀井茂説(19)：

「始め賢治も関教授のもとでの専攻を望んだらしい。しかし希望者が1名超過(注：教授1人当たり専攻生3～4名)し、そこで賢治は友に譲り、自身は肥料学担当の古川教授に替わったという。賢治らしい所作である。本来は古川教授が単独で指導するつもりであったが、“何らかの理由”で関教授にも

指導の助言をしてもらったのであろう。これは賢治の同級生である塩井義郎氏からの聞き覚えであるが、可能性は大きいように思われる。」

当初は「安山岩の風化の物理化学」、「安山岩及びその風化物の物理的化學的研究に就て」、「盛岡付近の石英粗面岩の研究」の論題（注：出典資料が見当たらないので、当初このような論題で研究を始めたのかどうか真偽は不明）であったが、途中から「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」に変わったとの“途中変更説”は考え難い。何れにしても賢治本人が残した証言がないので、どの説かは特定できないが、“亀井説”が妥当であろう。

関豊太郎教授の火山灰土壌の研究

生徒が得業研究を専攻する際には、学科の事情や教授達の専門や研究業績、勿論自分の希望など色々な条件が考慮されるが、賢治の得業研究専攻には、関教授の「火山灰土壌の研究」が大きな影響を与えていることは間違いない。

明治38年盛岡高農教授（地質及土壌学教室：鉱物及地質、物理、物理実験、気象、土壌学などを担当）となった関教授は、欧州留学（明治43年12月～大正2年5月）中に、日本（東京と盛岡）から持参した洪積層火山灰土壌（黒ボク土）の研究を行ない、火山灰土壌にアロフェン（特有な粘土鉱物）が存在することを発見。東北地方初め我が国に広く分布し農業上重要な火山灰土壌の研究（物理化学的特性や土壌膠質、分類体系など）をライフワークとして取り組んだ（11-13）。

鈴木梅太郎教授（植物營養論）は、高農恒例の夏期講演「日本に於ける農芸化学」（大正2年7月16日）（1）の中で、農芸化学分野での土壌学研究の問題にも言及している。「・・・東北地方には広漠たる原野あり黒土（注：腐植質火山灰土壌または黒ボク土）を以て蔽われ不毛の地と称す之が改良は單に學術上趣味あるのみならず國家經濟上緊急の問題なり而も未だ總括的な調査なし・・・本校は此の種の黒土を研究すべき最便利な位置にあり従て之を解決するは本校に責任ありと信ず。」

このように鈴木教授は土壌学の専門家ではないが、植物營養の観点から東北地方に広く分布する不良性黒ボク土の研究は、盛岡高農が責任を以て取り組むべき重要かつ緊急な課題であることを指摘している。この鈴木教授の提言は、関教授の研究を意識してのことであろう。講演内容は校友会報（第23号・大正3年2月）（1）に掲載されているので、翌大正4年4月に入学した賢治は、当然それを読んでいる

はずである。

鈴木教授の提言を待つまでもなく、盛岡高農では既に関教授が不良性火山灰土壌（注：腐植質火山灰土壌）の研究に取り組み、その改良「石灰岩散布による酸性火山灰土壌の中和処理改良」（13）についても思索・提言している。賢治は、このような関教授の研究に大いに関心を持ち、生涯にわたって多大な影響を受けた。

古川仲右衛門教授の専門と研究

古川仲右衛門教授は、賢治が入学する前年（大正3年10月）、農学科第2部・肥科学教室に赴任、土壌及肥料・化学・分析化学・同実験・無機化学・食品化学などを担当したが、農芸化学分野の中でも「肥科学・化学・分析化学」に精通していた。

前述（北水会報 第128号）したが、古川教授の得業研究は植物營養成分の分析など肥科学的課題が中心であり、賢治の同級生2人には「蠶蛹ノ利用ニ就テノ研究」と「澱粉粕利用方法ニ就テ」を研究させている。

興味あることに、得業研究と指導教官を調べたところ、古川教授と関教授の連名指導（注：主教授と副教授による共同指導）は、賢治が特例ではない。例えば、大正5年卒業生（11回生）では、2名は古川教授（主）と関教授（副）が指導教官で、逆に1名は関教授（主）と古川教授（副）となっている。つまり当時、得業研究を行なうに当たり、課題によっては指導教官（副）の助言・協力を依頼することは、特段希有なことではなかった。

賢治にとっての得業研究の意義

関教授の専攻希望者が定員を超過したため、賢治は友に譲り肥科学担当の古川教授のもとで得業研究を行なうことになった（19）。そこには“賢治独自の思案”があったのではないか。

賢治は、関教授のもとで盛岡や郷里花巻など東北地方に広く分布する“病土”（注：賢治は腐植質不良性火山灰土壌・黒ボク土を“病土”と呼んだ）の問題を認識し、その不良性の原因及び改良に強い関心をもっていた。そこで賢治は、腐植質火山灰土壌が植物栽培に不適である要因を明らかにするために、土壌中の植物に必要な養分（窒素、燐酸、加里、石灰など）に関連するテーマを得業研究として取り上げたと考えられる。

具体的な論題である「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を決める時には、当然、賢治は関教授と古川教授に相談したであろう。得業論文の冒頭で、指導教官（主）である古川教授から論題を教示

されたとあるが、それは形式的であり賢治は“自らの希望”でその論題を取り上げ、古川教授と関教授の承諾を得たのではないか。

「指導教官（主）である古川教授は、病気がちであり、さらに実家の家庭の事情で学校を休みがちであった。そのため古川教授は賢治の得業研究の指導を十分に行えなかったため関教授が代わって助言・指導した。」「古川仲右衛門教授が本来単独で指導するつもりであったが、何らかの理由で関教授に指導の助言をしてもらった。」

このような「病気（注：具体的にどのような病気か不明）」や「家庭の事情（注：父親の病気と家督相続）」で古川教授が賢治の得業指導を殆どしなかったような印象があるが、それは正しくないであろう。当初から古川教授（主）と関教授（副）の“連名指導”であったが、成績優秀で自主独立心が強い賢治のこと、得業研究の論題の選択や具体的な実験、論文の取りまとめなどは殆ど自分自身で行なったと考えられる。

賢治の得業研究には、俯瞰的にみると土壌・土壌物理化学的視点（関教授）、肥料・肥料化学的視点（古川教授）、植物生理・植物栄養的視点（鈴木教授）という3つの要素が含まれている。共通する基盤は、関教授のライフワークの一つである腐植質酸性火山灰土壌であり、それを肥料化学的・植物栄養的価値と結びつけた研究と言えよう。植物栄養（鈴木教授）との関連性は、腐植質中の無機成分として、植物に重要な燐酸（P）や加里（K）を取り上げたことから判断できる。（図1）

賢治の得業研究は、盛岡附近地質調査や稗貫郡地質土性調査などと相俟って、その後の彼の生涯において重要な意義をもつことになる。賢治は郷土岩手県内に病土「我が荒涼たる洪積不良土」が広く分布することを知り、その性質の研究と不良性の改良に心を砕いた。既に述べたが（本会報 第123号）、賢

治が後に小野寺伊勢之助教授（肥科学教室）に「炭酸石灰の肥効についての試験研究」を依頼したことから、賢治が如何にこの問題に関心があったかを示している。賢治は北上山地に无尽蔵に存在する石灰岩抹による酸性土壌の改良を願い、東北砕石工場技師としての最後の仕事に収束することになる。

賢治の作品に現れる古川仲右衛門教授

実在の人物が登場する賢治の短歌

賢治の短歌には、多くはないが「実在の人名」が登場するものが見られる。

- ・ 湊 純治（盛岡中学校教諭）
顔あかき 港先生 このごろは
エーテルのまこと冴えて来しかな
- ・ 阿部 孝（賢治と盛岡中学校同年）
これはこれ 水銀の海のなぎさにて
あらはれ泣くは 阿部のたかしら
- ・ 木村雄治（盛岡中学校同期生）
あざむかれ 木村雄治は 重曹を
インクの瓶にいれらにけり
- ・ 奥山銀茂（盛岡中学校同期生）
藍いろに 点などうちし 鉛筆を
銀茂よわれはなどほしからん
- ・ 吉野之雄（盛岡中学校同期生）
鉄砲を ねむげにいだき もぞもぞと
菓子を 食へるは 吉野なるらん
- ・ 橘川真一郎（盛岡中学校教諭）
ひとびとに おくれてひとり たけたかき
橘川先生野を過ぎりけり
- ・ プジェー師（盛岡天主公堂教会）
プジェー師よ 古き版画を好むとか
家にかへりて たづね贈らん

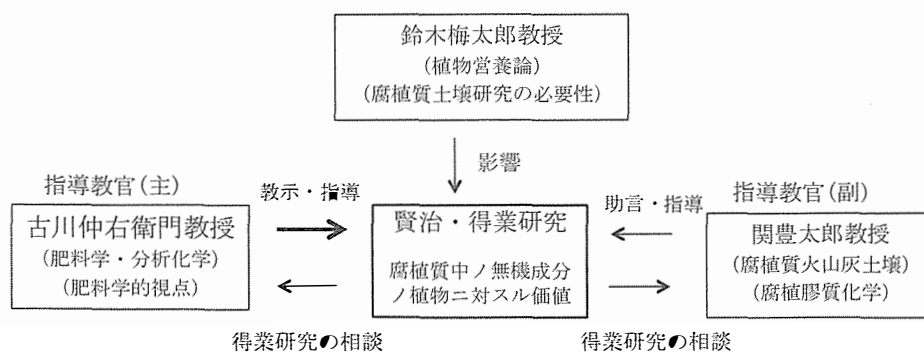


図1 賢治の「得業研究」と3教授の関係

その他2作品

- ・タッピング氏（盛岡浸礼教会牧師）
プジェー師や さては浸礼教会の
タッピング氏に 絵など送らん
- ・多田 鼎（浄土真宗僧侶）
本堂に 流れ入れる外光を
多田先生はまぶし給ふ
- ・島地大等（願教寺住職）
本堂の 高座に説ける大等が
ひとみに映る 黄なる薄明

古川仲右衛門教授を詠った賢治の作品

盛岡高農で学んだ賢治は、卒業するまで講義や実験実習などを通して多くの教授達と交わったが、その中の2人の教授を自作の作品に登場させている。古川仲右衛門教授（肥料学教室）と石丸文雄教授（林学科）である。古川教授は賢治にとっては身近な親しい存在であり、関教授と同様に学問上の恩師であった。石丸文雄教授については、次号で取り上げる。

大正6年、3年生になった賢治は、仲間と同人誌「アザリア」を発行するが、その第2号（7月18日）掲載の短歌に古川教授の姿を詠んでいる（14）。

- ・ゆがみたる青ぞらの辺に仕事着の
古川さんはたばこふかせり

仕事着（注：白衣のこと）を着て学生実験（写真4）の指導をしていた古川教授（ここでも「古川さん」と親しく呼んでいる）は、実験室から外に出てゆっくりとたばこをふかしている様子を詠ったものであろう。「愛煙家であった仲右衛門さんは、戦後、大垣の自宅にて乾燥させたイタドリの葉を切り刻み、手巻きの代用たばこをつくる姿を記憶していま

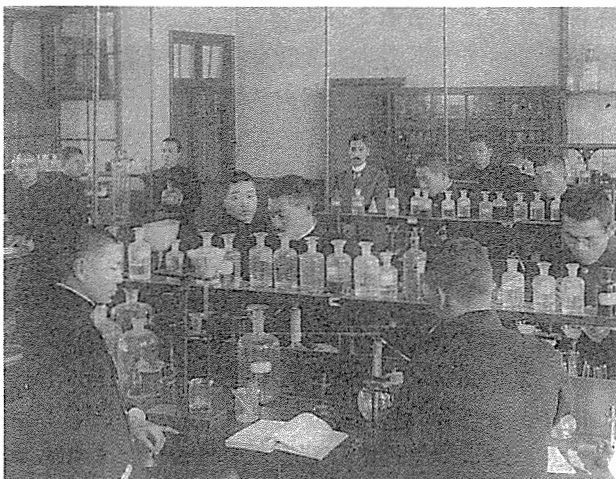


写真4 分析化学実験風景（大正6年頃）
白衣を着用していない中央の人物が古川教授

す。（子孫による回想談）（21）」と、古川教授はかなりの愛煙家であることが語られている。賢治はそんな愛煙家の古川教授が青ぞらのもとでたばこをふかして寛いでいる牧歌的な姿を見ていた。

盛岡高農には多くの教授達がいる中で、なぜ古川教授を詠ったのであろうか。このように賢治が自作の短歌に古川教授を登場させたのは、賢治が古川教授の人柄に特別に親しみを覚え慕っていたことを物語るものであろう。

大正11年5月21日、盛岡停車場で汽車に乗った賢治は、橋場線（盛岡・雫石間）の小岩井駅（写真5）に降り立ち小岩井農場内（写真6）を歩き回った。その時の風景を心象スケッチした詩集が「春と修羅の「小岩井農場」である。その「小岩井農場・パート1」に「化学の古川さん」が登場する（15）。その人物こそ恩師の古川仲右衛門教授である。

わたくしはずるぶんはやく汽車からおりた
そのために雲がざらつとひかつたくらみだ
けれどももつとはやいひとはある
化学の古川さんによく肖たひとだ
あのオリーブのせびろなどは
そつくりをとない農學士だ
さつき盛岡のていしやばでも
たしかにわたくしはさうおもつてゐた
このひとが砂糖水のなかの
つめたくあかい待合室から
ひとあしでるとき……わたくしもでる

農芸化学分野である農学科第2部は「化学」と略称され、また古川仲右衛門教授が肥料学・化学・分析化学・分析化学実験（写真4）などのいわゆる「化学系科目」を担当していたため、賢治は古川教授を



写真5 JR田沢湖線の小岩井駅
賢治が「つつましく肩をすぼめた停車場」と表現した駅舎はその頃と殆ど変わっていない。

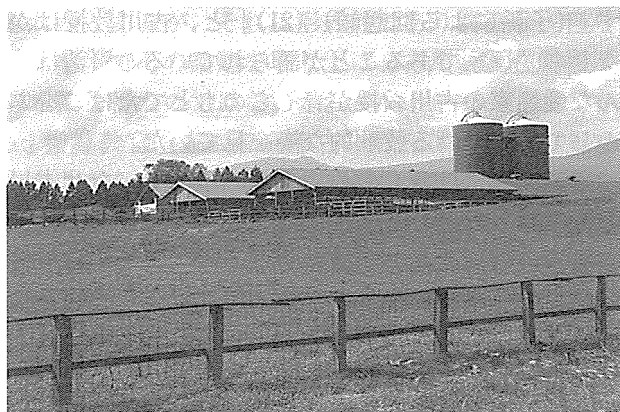


写真6 小岩井農場の風景
賢治は小岩井農場を頻繁に訪れている。

「化学の古川さん」と呼んだのである。

当時盛岡高農の教授といえば、関豊太郎教授を挙げるまでもなく、大変威厳があり生徒にとっては近寄りがたい存在であった。賢治は、関教授には畏敬の念を抱いていたが、古川仲右衛門教授に対しては、その人柄に親しみを覚えていたので「古川教授」とか「古川先生」ではなく「古川さん」と親しげに詠んでいる。

「あのオリーブのせびろなどは そつくりをとない農學士だ」古川教授は「オリーブ色（黄みを帯びた緑色）の背広」を好んで着ていたのであろうか。当時としては個性的で目立つ色の背広である。「仲右衛門さんは何事にも緻密で几帳面、口数の少ない静かなイメージの人でした。」「仲右衛門さんとはとても寡黙な方で、孫たちは“黙叔父（もくおじ）”と呼んでいました。」と、子孫による回想談（21）で古川教授の人柄が語られている。賢治はこのような古川教授の朴訥とした人柄を「をとない」と親しく表現しているのだ。

古川仲右衛門教授の盛岡高農退職と帰郷

大正3年10月22日、上杉 繁教授の後任として農学科第2部・肥料学教室に赴任した古川仲右衛門教授（36歳）は、大正10年7月18日に退職（休職満期）した。在職期間は僅か7年であったが、奇しくもその期間は賢治の在学と丁度重なっていた。

古川家は岐阜県海津郡城山村羽沢（現・岐阜県海津市南濃町羽沢）で代々名主を務めた家柄で、仲右衛門は古川家の長男（父義栄・母せん）として明治11年7月21日に出生した。ところが、父親義栄が大正7年11月に病死（62歳）したために、仲右衛門は長男として急きょ家督相続（大正7年12月25日）（40

歳）しなければならなくなった。恐らく大正7年中は、父親の病氣と死去、そして家督相続のため幾度となく郷里に帰らざるおえなかった。

既に述べたが、賢治は3年生の2学期以降（大正6年9月～）、古川教授（主）と関教授（副）との“連名指導”で得業研究に取りかかり、大正7年2月中には得業論文を提出した。また賢治以外にも山本延雄及び森本一男の得業研究も古川教授が直接指導している。この期間は、古川教授が父親の病氣など家庭内事情で帰郷したとしても、高農の校務や講義・実験は勿論、得業研究の指導にも特段差し支えなかったと思われる。

「賢治の得業論文の緒論にあるように、古川教授から研究テーマを教示されながら、結論で関教授に謝辞を述べているのは、古川教授のもとで完結するはずの得業論文が、父親の病と死去にともなう家庭事情によって職に復帰できなくなり、その後の指導が関教授に託されたことを示唆するものである（21）。」このような考え方もあるが、それは正しくないであろう。

「古川教授は病氣勝ちで休職することが多くなり、筆稿を学生に代読させて講義に代えたこともあった。」と言われるが（5）、それは大正8年（この年には一時休職して帰郷）以降のことであろう。因みに、大正8年3月には古川教授指導の学生4名が得業論文を提出しているので、前年の大正7年9月から翌大正8年3月にかけて生徒の得業指導をしたことになる。ところが、大正9年3月と大正10年3月には古川教授指導の得業論文は皆無で、また校務の公的記録も見当たらない。このことから大正8年4月頃以降は、病氣などの個人的及び家庭内事情で長期休職していたと推測される。その後、大正10年7月18日、古川教授は退職（休職満期）し帰郷した（2, 4）。

古川教授は、ビタミンB₁を発見した鈴木梅太郎教授の活躍、また関豊太郎教授や村松舜祐教授らの海外留学や華々しい活躍を目の当たりにしながら、研究者としての道や欧州留学の強い希望を諦め、無念な思いで帰郷せざるおえなかった（21）。

盛岡高農の同僚であった鈴木梅太郎教授がビタミンの発見で一躍有名になった時、孫たちに「いつも梅太郎、梅太郎と親しげに旧交を語り」「梅太郎はあであった、こうだった」とよく話していたという（21）。また郷里に戻った古川仲右衛門はフラスコやビーカーなどの実験器具を備えた化学実験室を自宅敷地内に設け、ここで甘藷からアルコールを生成する技術や白菜・トマトの栽培方法の研究に力を注いだという（21）。そこには古川仲右衛門の研究者と



写真7 盛岡高農退職・帰郷後の古川仲右衛門
農学科（第11回生）卒業20周年記念帖より

しての姿をかいま見ることができる。

古川仲右衛門教授（写真7）は、帰郷後は羽沢信用購買販売組合の創設、電線の敷設や医師の招聘、土壌調査や天然ガスの採掘、農業講座の開設など実践的な農業指導に当たった。更に用水確保のための羽沢谷マンボ（用水トンネル）の建設、下池干拓事業、野菜栽培研究のための農事試験場誘致、安八郡立農学校非常勤講師など農村振興や農学教育に大きく貢献し、後年、貴族院議員に推挙されたがそれを固辞したと言われる（21）。昭和38年7月、大垣市室町の自宅で83歳の生涯を閉じた。

東京帝国大学農科大学卒業（農学士）・福岡県立農事試験場技師・静岡県立農学校教諭・盛岡高等農林学校農学科第2部教授・安八郡立農学校講師・郷里での農業指導と農村振興など、その生涯を概観する時、賢治がいう「をとなし農学士」の中に「寡黙で温和な人柄」と「揺るぎない信念と行動」を見ることができる。

「今日、われわれは賢治の一身をかえりみない純粋な生き方や考え方に深い人間的魅力を感じ取るのだが、これらは古川仲右衛門の生きざまに相通じるものがあるように思えてならない。」これは鈴木隆雄氏（21）の思いである。また古川仲右衛門の姪の関戸幸子氏（21）は、「晩年の伯父の生活ぶりと賢治の生きざまはよく似ている。」と語っている。真摯な研究者であり教育者であることを願った古川教授は、己の病氣と名家の長男としての家督相続のため、高農での学究を断念して帰郷せざるおえなかったが、帰郷後は農業指導と農村振興に献身した。このような古川教授の生き方は、賢治の生涯にも影響を与えたのではないだろうか。

筆者も賢治と古川仲右衛門教授には多くの重なる

部分があるように思える。今回、古川教授について色々な資料を読み解くと、賢治が古川教授のことを「古川さん・古川さん」と親しく呼び、自作に詠ったのが分かるような気がする。

古川仲右衛門教授出身の岐阜と賢治との意外な関係

花巻在住の賢治の家系が古川仲右衛門教授ゆかりの岐阜県海津郡南濃町と関わりがあることが分かった。筆者にとっては意外な発見であったので、ここで岐阜と賢治との関わりについて、船戸政一氏の「宮沢賢治と岐阜」などの資料（8, 16-18, 20）を参考に紹介したい。

まず大筋は、賢治の父方（政次郎）の祖母キンの祖先が、岐阜関の刀匠・関孫六（金子孫六）兼元という人物で、その系譜は「岐阜刀匠関孫六（金子孫六）→美濃屋（京都呉服商）→関七郎兵衛（日詰）→祖母キン→父政次郎→賢治」となる。

金子孫六の3男宗三郎・美濃屋浄閑は京都で呉服商を開き、奥州南部領内の郡山（岩手県紫波町日詰）においても手広く呉服の商いをしていた。その美濃屋浄閑から4代目の金子七郎兵衛は、南部藩の要職・勘定奉行元締役に抜擢されたほどの豪商で、士分として金子姓、豪商として関姓、屋号は幾久屋（孫六家は菊屋）を名乗っていた。この金子七郎兵衛の孫が賢治の祖母キンである。

祖母キンは賢治17歳（大正2年）のときに62歳で没したが、賢治の詩や童話から感じ取れる研ぎ澄まされた鋭い感性は、祖母の芸術的な素質を受け継いだものと言われる。

賢治が「自分が岐阜関刀匠金子孫六の血縁」であり、また「古川仲右衛門教授が岐阜海津郡南濃町の出身」であることを承知していたのか分からない。しかし、古川教授と賢治とが盛岡高農に同時期に在籍し師弟関係にあり、賢治の得業研究を古川教授が指導し、賢治は作品の中で古川教授を「古川さん」と親しく呼んでいることなどを考えると、2人の間には言い得ぬ因縁を感じる。

本原稿をまとめる当たり、鈴木隆雄氏の「宮沢賢治の恩師—古川仲右衛門の生涯—」、船戸政一氏の「宮沢賢治と岐阜」「宮澤賢治と古川教授」、船戸政一氏・吉■昌子氏の「古川仲右衛門年譜」等の資料を参考にさせていただきました。本稿を閉じる当たり心から感謝の意を表します。

今回は、賢治が「先生のうちでは一番すきなひとでした。」と語っている石丸文雄教授（盛岡高農・

林学科)について取り上げる。

注) 農学部附属農業教育資料館では「古川仲右衛門教授と宮澤賢治」の常設展示を企画しています。古川教授に関連する資料(写真・書籍・教科書・ノート・実験器具・身近な生活道具など)がありましたら是非お知らせ下さい。

参考資料

- 1) 日本に於ける農芸化学：鈴木梅太郎、校友会報 第23号、53-57 (大正3年2月20日)
- 2) 校友会報 第43号 (大正10年12月25日)
- 3) 賢治の思い出(一)：岩田元兄、川原仁左門編「宮沢賢治とその周辺」、122 (昭和47年5月)
- 4) 得業論文と先生：亀井 茂、川原仁左門編「宮沢賢治とその周辺」、127-129 (昭和47年5月)
- 5) 農芸化学科の歩み：大矢富二郎、大矢富二郎先生退官記念事業会 (昭和54年7月)
- 6) 思い出の山川 思い出のまち 思い出の人々：塩井義郎、142-143 (昭和56年3月)
- 7) 卒業論文：年表作家読本 宮沢賢治、山内 修編著、河出書房新社、53 (平成6元年9月)
- 8) 兄、賢治の一生：宮沢清六、雨ニモマケズ、フォア文庫 (平成2年3月)
- 9) 羅須地人協会の事：佐々木清一、肥料科学 第13号、1-8 (平成2年)
- 10) 兄のトランク：宮沢清六、ちくま文庫 (平成3年12月)
- 11) 関豊太郎と宮澤賢治：亀井 茂、肥料科学 第15号、31-56 (平成4年)
- 12) 土壌肥料と宮沢賢治1—ペドロジスト、エダフォロジストとしての賢治—：井上克弘、日本土壌肥料学会雑誌 第67巻、第2号、206-212 (平成8年)
- 13) 土壌肥料と宮沢賢治2—関豊太郎と宮澤賢治—：亀井 茂、日本土壌肥料学雑誌 第67号、213-220 (平成8年)
- 14) 校本宮澤賢治全集 第1巻 本文編、筑摩書房、73 (平成8年3月)
- 15) 校本宮澤賢治全集 第2巻 本文編、筑摩書房、280 (平成8年3月)
詩集「春と修羅」第1集 (小岩井農場) (大正13年4月)
- 16) 宮澤賢治と岐阜 (上/下)：船戸政一、岐阜新聞 (平成11年11月11日/13日)
- 17) 古川仲右衛門年譜・古川仲右衛門と宮沢賢治：船戸政一・吉田昌子 (平成12年6月5日)
- 18) 宮澤賢治と古川教授：船戸政一、岐阜県郷土資

料研究協議会会報 郷土研究・岐阜 第89号、2-4 (平成13年10月15日)

- 19) 宮澤賢治と盛岡高等農林学校断片 (11) —盛岡附近地質調査と賢治得業論文をめぐって—：亀井 茂、早池峯 30号、144-171 (平成16年6月)
- 20) 宮澤賢治と岐阜：岐阜史学会代表 船戸政一、NHK岐阜文化センター講座資料 (平成16年12月17日)
- 21) 宮沢賢治の恩師—古川仲右衛門の生涯—：鈴木隆雄、濃飛の文化財 53号、岐阜県文化財保護協会 (平成26年3月11日)

訂正：第128号・14頁右下8行の校友会報 第41号 (大正9年12月1日) は大学図書館で所蔵。古川仲右衛門教授の記載事項はない。